

修羅の都

会津藩燃ゆ 序章

修羅の都

会津藩燃ゆ 序章

亮一

星 亮一 (はしりょういち)

昭和十年(一九三五)、仙台市に生まれる。東北大学文学部国史学科卒。マスコミの第一線に従事するかたわら『会津藩燃ゆ』で歴史小説を手がけ、以後、意欲的に作品を発表する。

著書／『敗者の維新史』(中公新書)『箱館戦争』『長崎海軍伝習所』(角川文庫)『会津藩燃ゆ』『仙台藩婦らざる戦士たち』『下北の大地』『越後風雲録』『万延元年威臨航米』(教育書籍)『会津白虎隊』『箱館五稜郭』(成美堂出版)ほか。日本ペンクラブ会員、東北史学会会員。

修羅の都 会津藩燃ゆ 序章

一九九二年三月二十五日 初版第1刷発行

著 者 星 亮一

発行者 堤 慎一

発行所 教育書籍株式会社

東京都新宿区高田馬場一―二八―六

郵便番号 一六九

電 話 〇三(三三〇五)〇〇二七

印 刷 明和印刷

製 本 渋谷文泉閣

検印廃止

定価はカバーまたは帯に表示してあります。

乱丁・落丁本がございましたら小社宛お送りください。送料小社負担でお取りかえいたします。

©1992 RYOICHI HOSHI

Printed in Japan ISBN4-317-60062-5 C0021

修羅の都
会津藩燃ゆ
序章

本書は『王城の守護職正・続』（角川文庫）を改題、大幅に加筆、一冊にまとめたものです。

目次

守護職拝命	5
会津藩上洛	31
狂気の沙汰	53
壬生浪士	74
将軍上洛	91
公知暗殺	106
クーデター未遂	131
薩摩藩接近	151
七卿都落ち	173
容保の病	193
池田屋事変	209
薩賊会奸	228
脂粉の香り	245
長州転向	262
会津藩隠密	280
薩長同盟	299
希代の奸物	317
魔性の都	338

カバ―装画
カバ―装幀
渡辺 俊明
今川 美玖

守護職拝命

一、

文久二年（一八六二）は、閏年^{うるうどし}で、八月が二度あった。閏八月は太陽暦でいうと、九月下旬に当たる。江戸は、まだ残暑である。町を歩くと汗ばんだ。

（外の空気を吸いたい）

会津藩主松平容保^{まつだいらかたもり}は、江戸城和田倉門^{わだくらもん}の江戸上屋敷で、臥^ふせていた。咳^{せき}がでる。夏風邪^{なつかぜ}をこじらせたのだ。

（この大事な時期に）

容保は、しきりに寝返りを打った。

書院でにわかにな怒声^{いかでか}が起こった。

「殿は何故に京都守護職を受けられたのだ」

大きな声は、国家老の西郷頼母に違いない。同じ国家老の田中土佐と会津より駆けつけてきたのだ。

容保は、起き上がって溜息をついた。

頼母は、盛んに江戸詰家老の横山主税常徳と留守居役の堀七太夫を責めている。

「横山殿、京都の情勢を聞くに、幕府の形勢は非というではないか。この至難のときに、京都を治めようなどと考えるのは、まるで薪を背負って火を救おうとするようなものだ」

頼母は、国もとをあずかる重臣だが、齒に衣着せずにズバズバ物を言う性格が災いして、容保とは肌が合わない。

容保は、元来が腺病質で身体が弱い。気分がすぐれないところに、頼母が来たので、いっそう機嫌が悪い。書院に姿を見せた容保は、

「予の決心に不服があると申すのか」

と、言葉を荒だてた。

「西郷殿、殿は考えに考えた末に決断されたのだ。殿の胸中也察していただきたい」

横山が口を添えた。

「殿のお気持ちはわかるが、国もとはこそって反対でござる」

頼母は、頑として譲らない。

「頼母、これは將軍のご命令なのだ。断われるはずはない。われわれは、未曾有の大役に命を賭

けて取り組むしかないのだ」

容保の顔は、熱と興奮でほてっている。

「そうはいつでも、何も会津が損な役を引き受ける必要はございませんまい。ほかにいくらでも」

「頼母、くどい！」

容保は、そう言うや、席を蹴って奥に消えた。

幕末時、これほど律義な殿様はいないといわれた松平容保は、天保六年（一八三五）十二月二十九日、江戸四谷の高須藩邸松平家の上屋敷で生まれた。

父松平義建は、美濃国（岐阜）高須城主である。尾張徳川家の分家で、石高は三万石、徳川一門ではあるが、小大名である。つまり容保は、会津松平家の婿養子なのだ。国家老の西郷頼母が容保と合わないのも、養子ということが尾を引いている。

会津松平家が、容保を養子に迎えた理由は二つある。

一つは、当然のことながら八代藩主容敬に子供がいなかったこと。もう一つは、容敬自身も養子で、しかも容保と同じ高須の出だったことである。容敬は、容保の父義建の異母兄弟なのだ。つまり容保の伯父である。そんなことで、容保の婿入りはトントン拍子に進んだ。

容保は十歳のとき、江戸城和田倉門の会津藩邸に入った。

容敬はこの時期、溜間詰めの大名で、ここには彦根の井伊玄蕃守、高松の松平讃岐守、姫路

の酒井雅楽守、松山の松平隠岐守、桑名の松平越中守らの諸大名がいた。溜間詰め大名というのは、毎月十日と二十四日に江戸城に登城し、老中に拝謁し將軍のご機嫌をうかがい、老中と政務について話し合い、ときには直接將軍に意見を述べることもあった。

容保は、江戸城に容保を連れ歩いた。

「会津殿は、可愛い婿をもらわれたものよ」

彦根藩主の井伊玄蕃守直弼は、こういつて眼を細めた。

容保の教育係は江戸家老の横山と国家老の山川兵衛重英である。横山は、会津に横山ありといわれた度量の人で、配下に野村佐兵衛、外島機兵衛、河原善左衛門、秋月悌次郎、広沢富次郎らの逸材をかかえていた。

「いいか、若殿をどう育てるかに会津藩の命運がかかっているのだ。お前らも心して殿に接せよ」

部下たちに厳命を下した。

山川は、会津では珍しく新しがりの人物で、弓矢より銃砲、漢学より蘭学を好み、会津で初めて種痘を取り入れた。

後に兵衛の孫三人が洋行するのも、祖父の血筋に大に関係している。

容保が会津藩を意識したのは、十五歳の春である。容保は初めて会津に下った。まばゆいばかりの緑である。容保は奥州街道を下り、白河から会津街道に入った。勢至堂峠を越え、い

よいよ会津である。都会育ちの容保にとって、すべてが新鮮に見えた。

「横山、あの山が磐梯山か」

「いかにも、そのとおりでございます。あの麓に藩祖保科正之公が眠っておられます」

「そうであつたな」

容保はうなずいた。

一行が三代の宿場に着くと、そこはもう黒山の人だった。若殿のお国入りとあって、会津城下から多数の家臣が出迎え、領民が沿道を埋めている。

容保が駕籠から下りると、

「おお！」

と、どよめきが起こった。

「見事なお姿だなし」

「会津もこれで、ますますご安泰だなし」

人々の歓声が街道を包んだ。

国家老の萱野権兵衛、築瀬三左衛門もいた。

「殿、ご機嫌うるわしく、おめでたい限りにございます」

権兵衛は満面笑みを浮かべて、容保を迎えた。

眼下に広大な猪苗代湖があった。北西の風が湖面を吹き抜け、白波が兎のように飛びはねてい

る。

(会津とはすばらしい所だ)

そのときの印象を容保は、いまでも覚えている。

二、

病に臥せていると、妙に頭が冴える。容保は、しきりに己の血筋を考えた。生家の高須ではない。会津松平家の血である。

先刻から家老の横山が、かたわらにいます。容保にとって横山は、父のような存在である。

(予には三人の父がいる)

容保は、時折そんなことを思った。一人は、実父の義建である。もう一人は義父の容敬で、三人目が横山だった。なにせ十歳のときから横山の教育を受けている。右も左もわからない容保を一人前の主君に育て上げたのは、横山だった。

「頼母の話は、一方的で困ります。あれも一向に大人にならない」

「もうよい」

容保の双眸に不安がある。

「殿、あまり気になさるな。世の中はなるようにしかならんもの。焦ってもいかんし、心配し過

ぎてもいかんもの。たしかに重荷だが、家臣たちは必ず殿を守ってくれます」

「うむ。困難に当たるのは会津の定めだ。それにしても家訓が重い」

容保は、天井を凝視した。

家訓というのは、会津藩主が守らねばならぬ十五か条の誓文である。

「殿！」

横山が声をかけた。

「少しお休みになられては」

「うむ」

「私は、所用がございますので」

「横山、久しぶりに家訓十五か条を聞きたい」

「何故でございますか」

「子供のころ、そちに何度も聞かされた。あれを聞くと、妙に心が静まったものだ」

「そうでしたか。先君の前で殿が唱和されたこともありました」

「あのとき、予は間違つて先君にしかられた」

容保は、笑みを浮べた。

「懐かしいお話でございます」

横山は正座をすると、家訓十五か条を読みあげた。

「一つ、大君の儀、一心大切に……」

あたりに朗々と横山の声が響いた。

「いかがでございますか」

一息つくと横山は容保を見た。

「勇気が湧いてきた。少し眠る」

容保は、眼を閉じた。会津松平家の家訓は、まさに怖るべきものだった。

第一条は、幕府親藩の立場から、將軍家に対する忠節を明示したもので、幕府に絶対服従を求めた。そして藩主が政治を行なう基本として、武備を怠らず、兄を敬い、弟を愛し、婦人の言は用いず、家中の風儀を励まし、依怙鬚眉を避け、口先だけの人間は用いず、近臣には他人の善悪を告げさせてはならない。これが為政者の心得だ、と説いたのである。

第十五条は、さらに厳しいものだった。藩主として領民を安泰にすることができないなら、土地を領有する資格がないので、上表して蟄居せよ、というのである。容保の脳裡には、この家訓があった。

松平容保が生まれ育った時代は、外国によって泰平の夢が破られる狂瀾怒濤の世であった。

会津は、いつもその渦中にいる不思議な運命にあった。

わが国が最初に泰平の夢を破られたのは、北方の海である。

文化四年（一八〇七）、二隻のロシアの軍艦がエトロフ沖に姿を見せた。軍艦から巨大な大砲が火を噴いた。

エトロフ島に駐屯している南部、津軽の藩兵は、逃げまどい、ボートで上陸したロシア兵は、小屋という小屋に火をつけ、あらん限りの狼藉を働いた。この事件を知った幕府は、南部、津軽のほかに秋田、庄内、さらに会津にも蝦夷地への出兵を命じた。文化五年（一八〇八）、容保が生まれるはるか以前のことだが、このとき会津藩は、千百九十余人の大部隊を派遣している。会津藩の北方の警備は、約七か月続き、実に五十一人が寒さや栄養失調で病死した。

南方の海には、フランスやアメリカ軍艦が出没していた。

わが国が鎖国政策を敷き、世界との交流を閉ざしている間、産業革命を経たヨーロッパ、アメリカは、汽車、汽船の発明によって交通を一変させた。

すでに清国との間に通商条約を結んだアメリカは、清国航路の寄港地として、日本の開国を望んだ。北太平洋で活動するアメリカの捕鯨船団も、薪、水、食糧の補給を求めている。会津藩は三浦半島、房総半島の警備に就き、外圧を肌で感じた。

嘉永五年（一八五二）——。養父容敬が、四十七歳の生涯を閉じた。

同年二月、容保は跡を継ぎ、肥後守に任ぜられ、第九代会津藩主に就任した。年齢、わずかに十七歳。青年君主の誕生である。

翌嘉永六年、容保の生涯を左右する大事件が起こった。ペリー艦隊の来航である。

六月三日、江戸湾を警備する会津藩兵に、

「異国船見ゆ!!」

の一報がもたらされた。会津藩は、ここに数百名の軍団を送っている。会津藩守備隊はただちに船を出した。

翌四日、江戸湾の西、浦賀に投錨したアメリカ艦隊を見て、会津藩兵は仰天した。

突然に現われた軍艦は、アメリカ合衆国東洋艦隊の司令長官、海軍少将ペリーの率いる艦隊である。

旗艦サスクエハナ三千五百トンを中心にミシシッピ千七百トン、帆船サラトガ、ブリマウスの四隻で、サスクエハナとミシシッピは、太い煙突からモクモクと煙をあげ、甲板には大砲が並んでいた。

江戸は喧騒の渦である。浦賀からひっきりなしに、注進の馬が駆け込む。老人や子供が郊外に逃れる。陣羽織、小袴、槍、鉄砲、火薬、武器は何でも飛ぶように売れた。

「殿、これはゆゆしき事態でござる」

家老の横山も狼狽えている。

戦争が始まれば、会津は先鋒である。

「よいか、事は慎重に運べ。決して敵に先駆けて戦をしかけてはならん。万一に備え会津から兵